

逢

萊

曲

透谷蟬羽著

透谷蟬羽

發兌所

養

眞

堂

明治二十四年五月廿八日印刷
同年同月廿九日出版



著者

東京市京橋區彌左衛門町七番地

北村 門太郎

發行者

東京市京橋區彌左衛門町七番地

丸山 垣穗

印刷者

東京市京橋區西紺屋町二十六番地

島 連太郎

印刷所

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

秀英 舍

賣捌所

東京市京橋區彌左衛門町七番地

養眞堂

序

蓬萊曲將に稿を脱せんとす、友人某來りて之を一讀し詰て曰く、蓬萊山は古來瑞雲の變遷くところ、樂仙の盤桓するところ、汝何すれど濫に靈山を不祥なる舞臺に假り來つて狂想者を悲死せしむる。又た何すれどわが邦固有の戲曲の躰を破つて擅に新奇を衒はんとはする。

蓬

萊

曲

(1)

余は直に之を遮つて曰く、わが蓬萊曲は戲曲の躰を爲すと雖も敢て舞臺に曲けられんとの野思あるにわらず、余が亂雜なる詩躰は詩と謂へ詩と謂はざれ余が深く關する所にわらず、韻文の戰爭は江湖に文壇の良將わり、唯た余が此篇を作す所以の者は、余が胸中に踳據せる感慨の幾分を寒燈の下に、彼の蠶娘の營々として纖絲を其口より延べ出る如く余が筆端に露洩せしむるに過ぎざるのみ、然も彼れが勞むるは家を造りて之に入らんとするあれども余が晝間劇務の後に滴々半烹の句を成すところの者は徒に余をして債を起して價ある白紙を反古と化せしむるに止まらんを知る。蓬萊山は大東に詩の精を迸發する、千古不變の泉源を置けり、田夫も

之に對してはインスピレイションを感じ、學童も之に對して詩人である、余も亦た彼等と同じく蓬萊嶽に對する詩人とあること久し、回顧すれば十有六歳の夏ありし孤筇其絶巔に登りたりし時に余は始めて世に鬼神ある者の存するを信ぜんとせし事ありし。崎嶇たる人生の行路遂に余をして彼の瑞雲横はり仙翁樂しく棲めると言ふ靈嶽を假り來つて幽冥界に擬し半狂半眞ある柳田素雄を悲死せしむるに至れるなり。友人再び曰く、然らば汝は魔鬼魅魍の類を信ずるや。余答へて曰く、信ずるにもあらず、信ぜざるにもあらず悲哀極つて頓眠する時に神女を夢み、劇熱を病んで壁上に怪物の横行するを見るが如きのみ。友人乃ち放笑して去る。此に於て童子をして燈に油を加へしめ筆を走らせて談話の概畧を記し以て序に代ふ。

透谷橋外の小樓に於て

明治二十四晚春

蟬 羽 子 識

蓬菜曲

曲中の人物

蟬羽子著

鶴翁 (蓬菜山の道士)

源六 (樵夫)

雪丸 (仙童)

柳田素雄 (子爵、修行者)

勝山清兵衛 (柳田の従者)

露姫 (仙姫)

大魔王、鬼王若干、小鬼若干、

戀の魅、青鬼、等。

第一齣 (一場)

蓬菜山麓の森の中

日没後

(柳田素雄琵琶を抱きて森中に徘徊し)

(従者勝山清兵衛少し晚れて来る。素)

(雄琵琶を取出て一彈調を成さず仰で蓬)

(菜嶽の方を眺略する所)

素。
雲の絶間もあれよかし、

わが燈火なる可き星も現はれよ、

この身さながら浮萍の

西に東に漂ふひまのわけくれに

なぐさめなりし斯の靈山、

いかなれば今宵しも、麓に着きて

見えぬ、悲しきかな〜。

戀しき御姿の見えぬはいかに、

わが心、千々に碎くるこの夕暮」

都を出で、

わがさすらへは春いくつ秋いくつ、

守る關なき歳月を、輕しとて仇し

草わらんじ。會釋なく履きては

捨て、履きては捨て、踏みてはのこし

踏みてはのこす其迹は

白浪立ち消ゆ大海原

越え來し方を眺むれば

泡沫の如くに失行く浮世。」

牢獄ながらの世は逃げ延びて

幾夜旅寢の草枕、

夢路はる／＼たどりたぞれど

頼まれぬものは行末なり。

折々に音づるゝと覺しきは

彼の岸に咲けるめでたき法の華、

からくも悶え手探れば、こはいかに、

まことゝ見しもの、これも夢の中なる。」

浮世の水は何所とも知ず流れ行く、

われも亦た流るゝ儘の旅の身を、

寄せて息めんたのめもなし。

早瀬緩瀬と變るは水のならひなる、

變れど止まることはなし、

わが旅もまた急ぐ急がぬ折こそあれ

いつかはまことに静まらん。

その少しづまる渚には、

蛋の刈藻の根を絶たで、

うたてや意をしがらむなる。」

あちこちのめづらしき山、めづらしき水、

愛づるが中こそ稍安く、

蟬の羽のひえわたる寢床にも眠りけれ、

眠るといふも眼のみ、

心は常に明らけく、世の無情をば

睨みつ慨きつ唧ちけれ。

左程にきらはるゝわれなれば、

逃げ出んこそ易けれど

わが出る路にはくろがねの

連鎖は誰がいかなる心ぞ、

去らばとて留まらんとすれば

答を擧げて追ふものぞある。」

家出せ時

つらく別れし戀人は、はかなくも、

無常の風の誘ひ來て

無き人の數に入れりと聞きしより

花のみやこも故郷も

空しくなりて、われをのまむとする

菩提所のみぞ待つなる可し。」

去ねよ、去ねよ、彼世には汝が友の

待ちあくがれて招くものを

と罵る聲は「死」のつかひよりや出らん、

われも世を去らまくほしき

思ひ出の昨日今日にはあらなくに如何せん

招けば「死」もわが友ならず。」

いづこを見ても鞭持つ鬼、

わが脊、わが面を圍むなり、

往け往けと追はるゝ儘に

行衛定めぬ旅衣、

汚れやつれて見る影もなき態

鬼の姿にもまがうべし。

左ればとて世を避る身は

何どか新衣のひまあらん。」

世の鞭笞稍や遠ければ

深山霞立籠めて空しく迷す夕もあり、

浮世の風こやみするところには

朝霧渡れる水の音に驚き覺る折もあり、

いづこを宿と定めねば

追はれぬ時は心も急かず夢は現と

かはりつゝ、

書取上げて眼を驅りつ

燈火の疲れはてゝ、自らに消ゆるまで。

書の無き折はまた

狂ふまで讀む自然の書、世のあやしき奥、

物の理、世の態も

早や荒方は窮め學びつ、生命の終り、

未來の世の事まで

自づから神に入りてぞ悟りにき。」

指屈むれば盡き難き

名所の數々に、昔と今を訪ひはたし

月をも花をも厭ぬる程に眺めにき。

さても西の都の麗はしきも、

また東方の花の堤の

屋形の船の酔心地。おもひかへせば

仇なりし夢なりし幻なりし。

南の末にたゞよひし時には烟燐く山

北の極をあさりし時には凍氷の丘、

めづらし、めづらしと

たゞへ喜びしが。これも亦た瞬刻

の慰快なりし。今は早や、夢にも

上らず、回想も動かず。

われには早や珍らしき

者あらず、樂しき者あらず、

この世、この世、美しくしき

この世の悲しきかな、抑今は何者ぞ、

山を河を、野を里を、殿を城を、

載せ餘し置飾りても、わが眼には

空虚どのみぞ見ゆるなる。」

空しくも見ゆるかな山と積む書の中、

われに來よとや、招かずもがな、

何に樂しからん、其が中に、盡ならぬわれ。

空しくも見ゆるかな、美しくしき戀心、

われに來よとや、招かずもがな、

何に嬉しからん、狂ふばかり欺かるゝを。

空しくも見ゆるかな、いかめしき家づくり、

われに來よとや、招かずもがな、

何に喜ばん、人をひれ伏せて、鬼ならぬわれ。

位も爵もあらずもがな、わが爲には。」

去は去ながら捨てし世の

いまはしき繩は我を、なほ幾重

巻きつ繋ぎつ、

逃しはやらじこの漢、と罵る聲の

いづれよりともなくきこゆるなり。

ぬぐへども、ぬぐへども、わが精神の鏡の

くもりを如何せん。

其の鏡にはつれなくも、

過ぎこし方のみ明らかに、

行手は悲し暗の暗。

その常暗の中を尋ねめぐり、あさりまはりて

いまだ真理の光見ず、

見るは唯いつはりの、立消ゆる漁火のみ。」

悲しきはこの身なり、世に従ひ難くて、

蓬

菖

曲

世に充つる魔靈の軍兵になり終らで。

在家も出家もおしなべて

うち靡かせて、世を、我物顔なる怪しの

鬼の、圍みの中にあればぞよ、

四邊は暗く人は眠るに、

われひとりねの床に涙の露車。」

(清兵衛素雄が袖をひきて)

暫時、しばし、

心を注め玉へや怪しき聲のするに。

何に、怪しき聲とや、

われは聞かず、其は何の聲ぞや。

近き彼方の森を襲ふ風の鳴るにもや。

否左ならず……あら復た聞こゆ……

今聞ゆるに。はて何所なる、怪しきかな。

素、我はえきかず、そはいづこに？

清、何所とも知らず……彼方此方につぶやく聲。

素、彼方此方に？つぶやくこそ？あやし！

然なり然なり、聲すなり、われも今聞きぬ

いかに、いかに、如何なる者の聲ならん、

鬼神の類や近づける。さもあらずば、

御山の靈や迎へ出でぬるか。

走りても鬼てもいまは詮なし、

怖ろしき目に會ひなんも計られず。

何にを清兵衛は恐るゝぞ、おに神は

爰のみならじ、何所にも住むなるを。

静まれよ、われは今、

彼を呼び出でん、いかなる様の者なりや。

あら聲すなり、聲すなり、

われに語ると覺ゆるぞ、おもしろし。

空中の聲、何れより來りしや、さかしらしくも世を罵る

空中
の聲、

壯者、塵をあつめて造られながら！

世の鬼に惱められて、世を逃れんどもがくどや、

あら笑止！ いつまでの旅路に思ひを遂げん、

五十の年月長し短かし問ふひまる

暴風雨吹き起り、秋の氣躍り、

波に吞まるゝ捨小舟、散り落つる樹の葉。

死の波寄する時いかん、身の秋來る折いかん、

わはれ、わはれ塵を蒐めし空蟬の五尺、

なほ傲り顔に、狹き世を旅び渡り、

暫時留まる春の駒に、

むちあげて、おのれの終りを急がする。

おかしくも嘲るかな、

抑も何物にてか、定まれる人の運命を

おのれを外に譏るらん。

おろかなるかな、われを知らずや、

素、

この靈山に棲み馴れて、世の神々を
下女男と召使ひ、ひれふさするもの
われなるを知らずや。

怪しきことを言ふものかな。

さては神々の上の神なるは汝か、

まことや、痴愚なるは神と呼べるもの、

世に禍危の業をのみなし、正しき者を

滅びさせ、偽はれるものを昌させ、

なほ神とは自から名告るなり！

空中
の聲、

まだ罵るや塵の生物！

狹き世の旅は早や爲さずとも、

わが住む山に登れかし。高き神氣を

受けなば誤まれる理の夢の覺めもやせん。

雪を蹈みて登らずや神の力もて。

語らんことは彼方にて。

素。

おさらばよ、爰は浮世、長くは談らじ。

あな怪しの神よ、はや去ぬるか、

まだしくひまに顯はれて早や消ぬるか、

めづらしき聲、めづらしき罵言、

いづれに失せて行きぬるや。

濃き雲を離れて現はるゝ星ひとつ、

それか？ それならじ、それも早や隠れぬ、

何所にや去りけん、も一度顯はれずや、

いなよ、早や呼ひ返へすべき術はあらじ。」

御雪を踏み登れと言へり。

神の力もて登れと言へり。

かねての望みはありながら、

いかでわれ、このわれが、

神の力なくて登るべきや雪の御山に。」

清兵衛、これをいかにす可き。

清。

父君に托ねられて都を跡に旅鳥の、

ねぐらをどこぞ白波の

打ちかへし打ちかへす君が心の荒磯を、

主なればこそ、…頼なればこそ、…

わが身は良しや深山路の

苔の袂に老ひ朽ちぬども、

君が身に恙あらせじと祈りつ

願ぎつ歳月空しく過にけり。」

君のありこし不満、不平、不和の

はじめ、をばり知れるこの身、

兎ても世には歸へり玉はじと、

涙ながらに思ひあきらめても

さて悲しきかな、君が心の荒らくして

悪魔を呼びて朋友となすとは！

今宵いかなる故やらん

檜の根を枕の昨夜の夢裡も、

こゝろにかゝる折しもや、今の惡鬼の

罵り嘲ずる聲音、わが健き足の、

歩めぬほどに怖ろしや、怖ろしや。」

昨夜の夢ど？ あかしきこともあらば

何どか今まで隠しつる。」

否、あかしきことならず、あそろしき

目に會ひぬ。

其の恐ろしきことこそあかしきなれ

いざ語れ、語らずや。

きみは彼方の檜の根を、

われはこなたの檜の根を、枕となして、

狼の遠吠絶て、息めば心は早や眠り、

眠ると思へばまた覺めて、

眠る覺むるの境もわかずなりしころ、

世を去り玉ひと聞きつる

露姫……の、端なくも、わが枕邊に

佇まれける。」

素、何に、露！ 露姫とや！

露がいかに……姫がいかにせし。」

清、姫はやつれ衰ろへし姿して、

「素雄どのを何とよこさぬ」

ど、ひと言は聞しも、あどは野風

のそよ吹くのみ。」

素、笑しや、夢はいつはり多し。

其を心にかげなば、世には、

まことばなかりなん。

姫がごと、われも思はぬにはあらねども

空蟬のからは此世に止まれど、魂魄は

飛んで億萬里外にあるものを。

つらく思へば、このわれも、

世の形骸だに脱ぎ得たらんには、

姫が清よき魂の飄々たる蝴蝶をば、

追ふて舞ふ可し空高く。

人の世の塵の境を離れ得で

今日までも、愚や墟坑に呻吟けり。

とても限りなき苦悶をば

こよひ解き去り、形骸をば

世に捨てゝ行かんや。「死」ども「滅」ども

世の名を付けて、われを忘れさせ、

彼方の御山の底の無き

生命の谷に魂を投げいれん。」

「死」ども「滅」どもや？ 其は恐ろしき

者なりかし。わが君これを願玉ふ

あな悲し護り玉へや神よ佛よ

素。

徒らに神の名を呼びそ。

死は恐るべき者ならず、

暫しが程の別れの悲しみのみ。

わか如く世に縁なきものは、

死こそ歸ると同じ喜びなれ。去るならず

別るゝならず、めぐり會ふ人もあるべし

うれしどこそは思ふ可けれ。

世にありて、

梁を走せ、佛壇に潜み、

棚を掠め、鍋を覗ふ業、

鼠はなせど、人の事ならじ。

鐵の鎖につながれて、窓には風も通はさぬ

囚牢の中に、世の人安々眠れども、

悲しみ覺えし身にはまどろまされず、

したしむものは寂しく懸る軒の月。

清、

軒下に狹まゝ穢き籠の中、
擦餌に育てあげられし鶯の、
春になれば鳴かぬや何ぞ鳴かぬと責られて、
聲は折々揚げしかど

庭面の梅が香欲くて鳴しのみ。」

この囚牢、この籠を、

こよひならねば何時破るべき！

あさらばよ清兵衛！

この囚牢、この籠にもあさらばよ！

これよりはわれわが君ぞ！

魔にもあれ鬼にもあれ、來れかし來れかし

わが道案内させてん、

早や行かん、あさらばよ！

待ちたまへ、わが君よ、

悲しき思出をせらるゝかな、

清、

素、

みやこには戀し戀しと父母の

老ひたる君や待ち詫び玉ふなるに、

そを捨て、何地へ渡り玉ふぞや。

要なきことは言はずもあれ、この世

わが物ならず、わが物ならずかぞいろも。

戀ひし親しの睦みとて

母が落せしひとしづくとても

思へば長からぬ世の寶ぞ。」

誰が抑も何心にてや造りたりけん、

このわれ、塵のわれ、ひとやの中のわれ、

くらさ、さびしさ、やましさ、かなしさを

知らず顔なる造りぬしや誰れ？

(素雄行んとす)

こはいかに、わが君狂ひたまふか？

いづこへや行き玉ふなる。

素、

狂ひはせず、静かに家に歸るなれ、

われを捨ておけ。汝は行きて、

ひとやのうちの家を守れかし。

おさらばよ、かねて背きしたらちねにも！

清、

否、いづこへなりと従はしてよ、

君が爲には何にか惜まん。

素、

否よ、否よ、われひとりならでは……

雲の中には伴は要なし。

いざや、いざや、別れぞ、別れぞ、

生別れども、死別れども

ならばなれ！

